

I 患者情報

1 総括及び全数把握対象疾患

- ・ 一類～五類感染症
- ・ 新型インフルエンザ等感染症
- ・ 獣医師が届けを行う感染症

2 定点把握対象疾患

- ・ 週報・月報対象疾患「五類感染症」

3 鹿児島県の風しん予防対策

- ・ 鹿児島県の妊婦における抗体検査の調査事業

1 総括 及び

全数把握対象疾患

- (1) 一類感染症
- (2) 二類感染症
- (3) 三類感染症
- (4) 四類感染症
- (5) 五類感染症
- (6) 新型インフルエンザ等感染症
- (7) 獣医師が届けを行う感染症の発生状況

総括及び全数把握対象疾患に関する動向

(2021年1月～12月)

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員長

鹿児島県医師会長

池田 琢哉

【トピックス】新型コロナウイルス感染症の流行

1月：(全国) 緊急事態宣言の発令 (1/8～2/7)

埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県において緊急事態宣言が発令された。同月14日から栃木県、岐阜県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、福岡県に拡大。埼玉県、千葉県、東京都及び神奈川県は3月18日まで延長された。

(本県) 鹿児島県における感染拡大の警戒基準をステージⅢ(感染者急増)に引き上げ、感染拡大警報の発令 (1/22～2/7)

「接触機会の低減」(感染拡大地域への不要不急の往来自粛要請、飲食店の営業時間の短縮要請)と「事業継続の支援」(県事業継続緊急支援金給付事業、営業時間短縮要請に応じた事業者への協力金)を柱とした施策をもとに、県知事が感染拡大警報を発令した。

2月：(全国) ワクチン接種開始

医療従事者約4万人が対象となった先行接種が2月17日から開始された。重症化リスクの大きさ等を踏まえ、まずは医療従事者等への接種、高齢者、基礎疾患を有する者、高齢者施設等の従事者へ順次接種が進められた。

(全国) 指定感染症から新型インフルエンザ等感染症に位置づけられる

新型インフルエンザ特別措置法等の一部を改正する法律が2月13日に施行されたことに伴い、新型インフルエンザ等に位置付けられた。感染症法上の所要の措置を講ずることができ、その範囲はこれまでと変更はない。

4月：(全国) 「まん延防止等重点措置」が大阪府、兵庫県、宮城県へ適用 (4/5～5/5)

「まん延防止等重点措置」は、一部地域における感染の急拡大を封じ込めることが目的であり、ステージⅢ相当である他、感染拡大の状況を勘案して、政府が対象とした都道府県知事が市町村など特定の地域を限定して適用するもの。不要不急の外出自粛の要請、飲食店の時短営業を要請できる。

京都府、沖縄県は4月12日から5月5日まで、東京都は4月12日から5月11日まで。

(全国) 緊急事態宣言の発令 (4/23～5/12)

東京都、京都府、大阪府、兵庫県に緊急事態宣言が発令された。その後、愛知県及び福岡県が同月12日から、北海道、岡山県及び広島県が同月16日から、沖縄県が同月23日から5月31日まで、一部道県は6月20日まで延長された。全国で全ての緊急事態宣言が解除されたのは9月30日となった。

7月：(本県) 7月1日、警戒基準をステージⅡへ引き下げ

第19週(5/10～5/16)の313例をピークに漸減傾向で、一日当たり一桁台の患者数まで下がった。県は、感染拡大の警戒基準における感染状況の段階を医療提供体制がひっ迫している状況にはないと判断から、引き下げをおこなった。

8月：(本県) 8月13日、最高レベルのステージⅣ(感染者爆発的拡大)へ引き上げ、県独自の緊急事態宣言を発令

(本県) 8月20日、鹿児島県が「まん延防止等重点措置」適用(～9/21)

措置区域(鹿児島市、霧島市、始良市)では飲食店に酒類の提供停止を求め、大規模集客施設には営業時間短縮や入場者制限等が要請された。

10月：(本県) 10月3日、令和3年3月23日以来194日ぶりに新規感染者の公表がなかった

10月7日、警戒基準をステージⅡ(漸増)へ引き下げ

11月：(本県) 新型コロナウイルス感染症の届出は少なくなったが、定点把握・全数把握対象疾患ともに報告数・届出数が増加しはじめる

(全国) 11月30日、新たな変異株であるオミクロン株が確認された

12月：(本県) 年末年始の人流を見越した無料PCR事業が開始された

【定点報告疾患の発生状況】

定点把握対象疾患(対象25疾患)では感染性胃腸炎、手足口病、無菌性髄膜炎、薬剤耐性緑膿菌感染症、性器クラミジア感染症、淋菌感染症が前年より微増、RSウイルス感染症は秋期に流行が見られた。

いずれの疾患も、新型コロナウイルス感染症による感染症予防効果の影響で、流行が抑制されたようにみられる。

特にインフルエンザは、県内及び全国ともに流行が認められなかった。1999年感染症発生動向調査システム(NESID)稼働以降、最も少ない報告数であった。

県内では、インフルエンザ定点医療機関から、前年11,164人の報告があったのに対し、令和3年は22人(累積定点当たり報告数0.24)であった。

感染性胃腸炎は小児科定点から13,477人(累積定点あたり報告数249.57)の報告があり、令和2年と比較すると207人多かった。年間では総じて低値で推移し、第3週(1/18～1/24)が9.78で、最も高値であった。平成29年21,597人、平成30年20,856人、令和元年19,109人と推移している。累積定点あたり報告数をみると、本県は全国の約1.5倍で推移した。

一方で、11月13日、出水市で高病原性鳥インフルエンザの疑似患者が確認され、鳥インフルエンザ(H5N1)の届出があった。H5N1は人に感染しやすいとして二類感染症に指定されている。その後の流行は見られなかった。

RSウイルス感染症は、小児科定点医療機関から4,900人(累積定点あたり報告数90.74)の報告があり、前年より1,814人多かった。第40週(10/4～10/10)を中心に大きな流行が認められた。全国では春期に、本県では秋期にそれぞれ大きな流行がみられた。

【全数把握対象疾患の概要】

○一類感染症

発生報告はなかった。

○二類感染症

届出は結核のみであった。

届出数は 241 例で、前年の 242 例に比べ 1 例少なかった。2 年前の令和元年は 352 例であり、2 年連続で例年と比較して 100 例以上の減少傾向にある。新型コロナウイルス感染症の影響で、患者の濃厚接触者の検査対象数を絞ったため、無症状病原体保有者が例年より少なく、コロナ収束後、増えることが懸念されている。

病型では肺結核が 124 例、年齢別では 80 歳以上が 94 例、60 歳代 34 例、70 歳代 31 例の順で多く、60 歳以上が全体の約 66% を占めている。

また、WHO は、2020 年の世界での結核による死者は 150 万人、前年の 140 万人を上回り、10 年以上ぶりに増加に転じたと発表した。原因は、新型コロナウイルス感染症の流行により医療提供体制がひっ迫し、結核への対応が不十分であったことが挙げられている。

○三類感染症

届出は腸管出血性大腸菌感染症のみであった。

届出数は 46 例で、前年の 41 例に比べ 5 例多かった。患者 29 例、無症状病原体保有者が 23 例。月別では、9 月 18 例、6 月 9 例、7 月 8 例の順に多い。血清型別では、O111、O157 がそれぞれ 14 例、O26 が 11 例、O103 が 2 例の順に多かった。年齢別では 1 歳以下が 9 例、30 歳代 5 例、3 歳が 4 例の順に多く、保健所別では、鹿屋から 18 例、鹿児島市、始良市からそれぞれ 9 例、徳之島から 6 例の順に報告数が多かった。

○四類感染症

つつが虫病 82 例、日本紅斑熱 28 例、レジオネラ症 13 例、重症熱性血小板減少症候群 6 例、A 型肝炎、E 型肝炎がそれぞれ 3 例であった。

つつが虫病は 82 例で前年の 92 例より 10 例少なかった。都道府県別では平成 23 年以降、全国第 1 位。届出受理保健所別では鹿屋 26 例、鹿児島市 20 例、始良 9 例の順であった。

日本紅斑熱は 28 例で前年の 18 例より 10 例多かった。都道府県別では、長崎県と同数で 5 番目に多かった。名瀬保健所管内で 5 例発生しており、届出受理保健所別では、鹿屋市 19 例、名瀬 5 例、志布志 2 例の順であった。

重症熱性血小板減少症候群は前年より 3 例増加。年齢別では 70 歳代が 3 例、80 歳以上 2 例、50 歳代が 1 例だった。

○五類感染症

梅毒 56 例、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 21 例、急性脳炎 18 例、侵襲性肺炎球菌感染症 16 例、劇症型溶血レンサ球菌感染症 9 例、後天性免疫不全症候群、クロイツフェルト・ヤコブ病それぞれ 6 例、百日咳、破傷風、侵襲性インフルエンザ菌感染症それぞれ 3 例、アメーバ赤痢、播種性クリプトコックス症、ウイルス性肝炎（A 型・E 型を除く）、水痘（入院例に限る）それぞれ 2 例の計 149 例の報告があった。

梅毒は、前年（令和 2 年）より 18 例多い 56 例であった。全国では平成 27（2015）年と比較して 7 倍以上に増加しており、都市部での急増に伴い、地方での増加傾向も顕著になっている。

百日咳は 3 例で、前年より 80 例少なかった。平成 30 年から全数把握対象疾患となったが、令和元年の 728 例から令和 2 年は 83 例、令和 3 年は 3 例と激減している。新型コロナウイルス感染症の流行による感染症対策の影響と見られ、コロナ収束後に増加が懸念されている。

【総括】

新型コロナウイルス感染症の流行により、感染予防策の徹底がなされ、その他の感染症が抑制されている一方、表面化していない可能性が考えられる。世界的にも、SDGsにおける感染症対策について、HIV/エイズの流行抑制、マラリアによる死亡数の半減など成果がみられていたが、新型コロナウイルス感染症の流行とそれに伴う様々な影響により、成果の後退という事態に直面していると言われている。

特にコロナ以降、性感染症が急速に増えており、注意喚起が必要である。薬剤耐性菌もコロナ流行の陰に隠れているが、世界的に広がりつつあり、今後の動向に注視していきたい。

コロナ収束後は、これまでのコロナの感染対策の徹底によって、多くの感染症に十分な免疫を獲得していない子どもが多く、コロナ前以上に警戒が必要だと考える。

本感染症発生動向調査事業定点医療機関、並びに全数把握対象疾患のご報告をいただいた医療機関に感謝申し上げますとともに、今後も感染症の早期発見と早期治療に努めることで、地域への感染症防止に尽力していきたい。

(1) 一類感染症の発生状況

発生報告なし

(2) 二類感染症の発生状況

令和3年の県内における二類感染症の届出は、結核が241例(男性124例, 女性117例)で, 令和2年の242例に比べ, 1例少ない届出であった(表1-1-1, 表1-1-2, 図1-1)。病型では, 肺結核(124例), 無症状病原体保有者(76例), その他(41例)で, 年齢別では, 80歳以上(94例), 60歳代(34例), 70歳代(31例)と, 60歳以上が全体の約66%を占めている。

表1-1-1 月別発生状況

月	報告数	無症状病原体保有者 (再掲)
1	16	8
2	16	6
3	25	7
4	21	7
5	25	6
6	19	10
7	26	7
8	15	2
9	17	7
10	17	4
11	25	7
12	19	5
合計	241	76

表1-1-2 保健所別届出状況

保健所名	報告数	無症状病原体保有者 (再掲)
鹿児島市	110	43
指宿	3	0
加世田	15	9
伊集院	3	0
川薩	19	2
出水	7	2
大口	11	6
始良	25	0
志布志	3	2
鹿屋	22	7
西之表	1	1
屋久島	0	0
名瀬	18	4
徳之島	4	0
合計	241	76

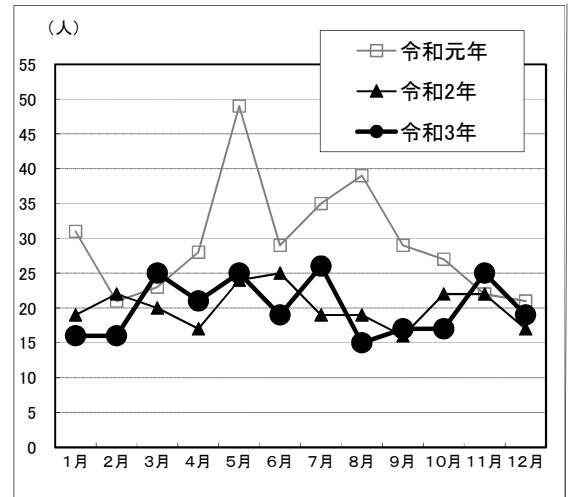


図1-1 令和元～令和3年の結核発生状況

(3) 三類感染症の発生状況

令和3年の県内における三類感染症の発生状況は, 腸管出血性大腸菌感染症46例(図1-2-1, 図1-2-2, 図1-2-3, 図1-2-4, 表1-2-1, 表1-2-2, 表1-2-3)であった。

○腸管出血性大腸菌感染症

県内における腸管出血性大腸菌感染症の届出状況は, 前年(41例)より5例多い46例(患者23例, 無症状病原体保有者23例)で, 性別は男性22例, 女性24例であった。月別では9月(18例), 6月(9例), 7月(8例)の順に(図1-2-1, 図1-2-3), 血清型別では0111, 0157(それぞれ14例), 026(11例), 0103(2例)の順に多かった。(図1-2-2, 図1-2-4, 表1-2-1)。年齢別では, 1歳以下(9例), 30～39歳(5例), 3歳(4例)の順に多く(表1-2-2), 保健所別では, 鹿屋(18例), 鹿児島市, 始良(それぞれ9例), 徳之島(6例)からの報告が多かった(表1-2-3)。

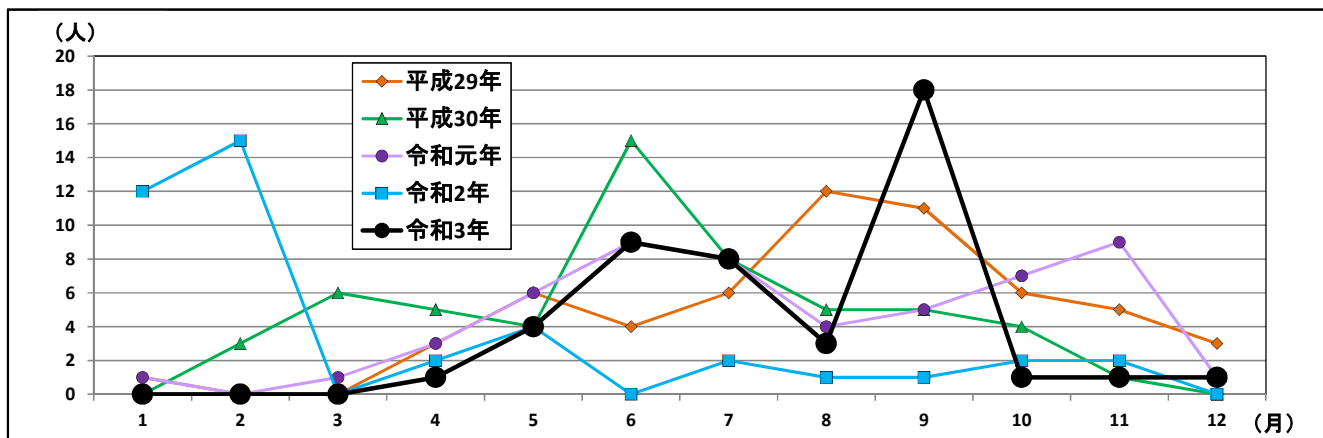


図1-2-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別月別患者発生数

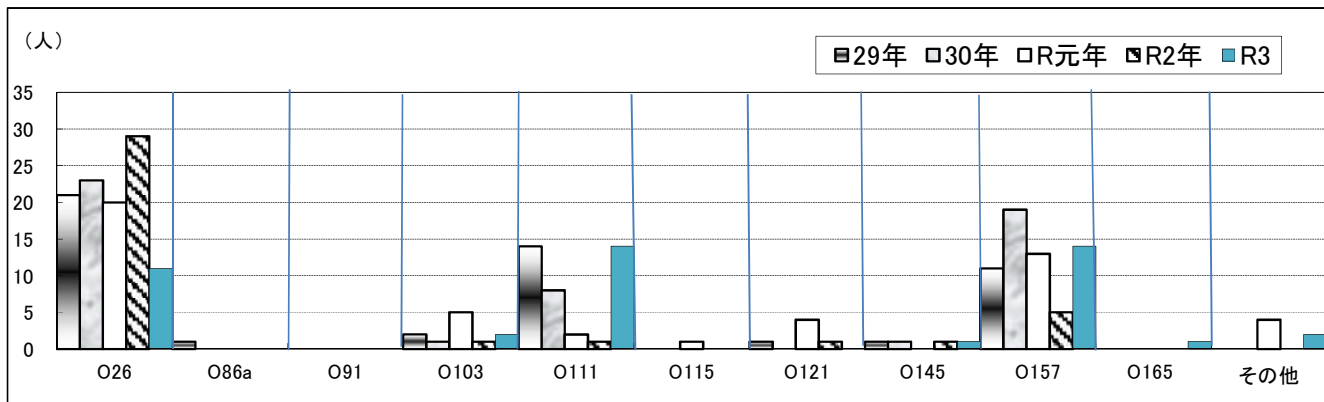


図1-2-2 腸管出血性大腸菌感染症の血清型別

表1-2-1 腸管出血性大腸菌感染症の年別血清型

年	型別	O26	O86a	O91	O103	O111	O115	O121	O145	O157	O165	その他	不明	合計
平成24年		12	0	2	2	61	0	2	1	30	1	4	2	117
平成25年		14	0	0	6	5	1	3	0	25	0	8	3	65
平成26年		25	0	0	3	9	0	2	1	18	3	4	3	68
平成27年		12	0	0	1	6	1	2	0	20	0	2	5	49
平成28年		14	0	0	3	7	1	0	0	19	0	2	5	51
平成29年		21	1	0	2	14	0	1	1	11	0	0	6	57
平成30年		23	0	0	1	8	0	0	1	19	0	0	4	56
令和元年		20	0	0	5	2	1	4	0	13	0	4	5	54
令和2年		29	0	0	1	1	0	1	1	5	0	0	3	41
令和3年		11	0	0	2	14	0	0	1	14	1	2	1	46
合計		181	1	2	26	127	4	15	6	174	5	26	37	604

表1-2-2 令和3年における腸管出血性大腸菌感染症の性別及び年齢別報告数

年齢別	性別	～1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10～14歳	15～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳以上	合計
男		3	3	2	3	0	0	1	2	0	3	0	0	1	2	0	1	1	22
女		6	0	2	0	2	0	0	0	1	0	0	3	4	1	1	2	2	24
合計		9	3	4	3	2	0	1	2	1	3	0	3	5	3	1	3	3	46

表1-2-3 令和3年における腸管出血性大腸菌感染症の保健所別報告数

保健所	鹿児島市	指宿	加世田	伊集院	川薩	出水	大口	始良	志布志	鹿屋	西之表	屋久島	名瀬	徳之島	合計
報告数	9	1	0	0	2	0	0	9	1	18	0	0	0	6	46

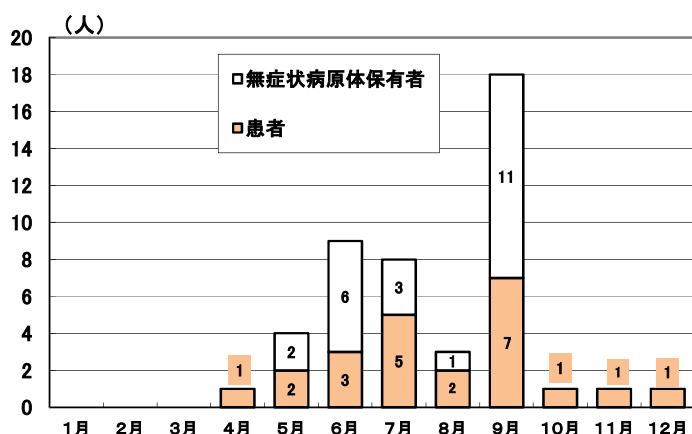


図1-2-3 令和3年における腸管出血性大腸菌感染症の月別・病型別報告数

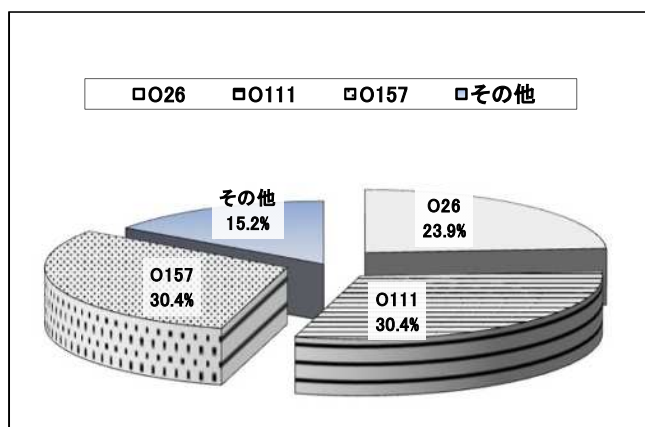


図1-2-4 令和3年における腸管出血性大腸菌感染症の血清型別割合

(4) 四類感染症の発生状況

令和3年の県内における四類感染症は、つつが虫病(82例)、日本紅斑熱(28例)、レジオネラ症(13例)、重症熱性血小板減少症候群(6例)、A型肝炎、E型肝炎(それぞれ3例)であった(表1-3)。つつが虫病及び日本紅斑熱の年次別報告数推移を図1-3に示した。

表1-3 四類感染症の発生状況

疾患名	年	平成	24	25	26	27	28	29	30	令和	元	2	3
	つつが虫病		48	38	41	67	77	66	89	66	92	82	
日本紅斑熱		17	14	14	11	22	18	22	18	18	28		
レジオネラ症		5	3	11	4	19	7	8	17	16	13		
重症熱性血小板減少症候群(SFTS)		5	4	6	4	11	9	8	3	6			
A型肝炎		2	1	34	1	1	1	2	3	3			
E型肝炎		0	0	1	0	1	0	3	0	2	3		
レプトスピラ症		3	3	0	1	5	1	0	2	0	0		
Q熱		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0		
デング熱		1	5	0	1	2	0	0	3	0	0		
チクングニア熱		0	0	0	0	0	0	0	1	0	0		
Bウイルス病		0	0	0	0	0	0	0	2	0	0		
ライム病		1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
合計		76	69	105	91	131	104	132	120	134	135		

○ つつが虫病

県内におけるつつが虫の発生状況は、前年(92例)より10例少ない82例であった。都道府県別の報告数(544例)では、前年に引き続き全国第1位であった(2位千葉県、宮崎県(それぞれ72例)、4位岐阜県(28例))。性別では、男性(48例)、女性(34例)で、月別では、12月(45例)、11月(18例)、1月(14例)の順に多かった。年齢別では、70歳代(35例)、80歳以上(21例)、60歳代(18例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿屋(26例)、鹿児島市(20例)、始良(9例)の順であった。

○ 日本紅斑熱

県内における日本紅斑熱の発生状況は、前年(18例)より10例多い28例であった。都道府県別の報告数(486例)では、広島県(89例)、三重県(53例)、島根県(36例)、和歌山県(32例)の順に多く、本県は長崎県と同数で5番目に多かった。性別では、男性が17例、女性が11例で、月別では、7月、11月(それぞれ5例)、4月、5月、6月(それぞれ4例)、9月、10月(それぞれ2例)の順に多かった。年齢別では、60歳代(10例)、80歳代以上(8例)、70歳代(6例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿屋(19例)、名瀬(5例)、志布志(2例)の順であった。

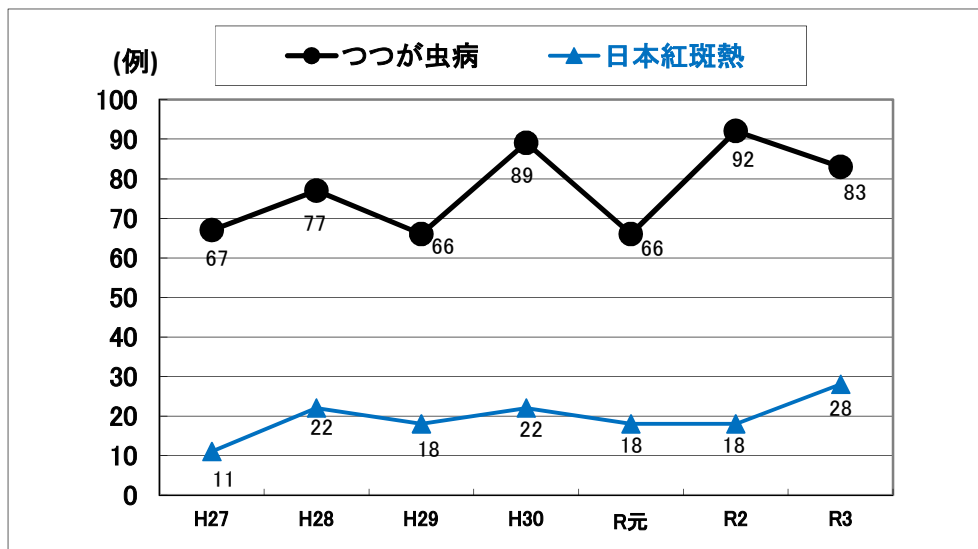


図1-3 つつが虫病及び日本紅斑熱の年別発生状況

○ レジオネラ症

県内における届出状況は、前年(16例)より3例少ない13例(男性11例, 女性2例)であった。病型別では、すべてが肺炎型であった。月別では、4月, 10月, 11月(それぞれ2例), 1月, 5月, 6月, 7月, 8月, 9月, 12月(それぞれ1例)であった。年齢別では、80歳代以上(5例), 50歳代(4例), 60歳代(2例)の順に多かった。届出受理保健所別では、鹿児島市(6例), 大口, 始良(それぞれ2例), 伊集院, 川薩, 名瀬(それぞれ1例)の順であった。

○ 重症熱性血小板減少症候群(SFTS)

県内における届出状況は、前年(3例)より3例多い6例(男性4例, 女性2例)であった。月別では、10月(3例), 6月(2例), 4月(1例)であった。年齢別では、70歳代(3例), 80歳以上(2例), 50歳代(1例)の順に多かった。

○ A型肝炎

県内における届出状況は、前年(3例)と同数であった(男性1例, 女性2例)。月別では、1月, 3月, 5月(それぞれ1例)であった。年齢別では、50歳代, 70歳代, 80歳代以上(それぞれ1例)であった。届出受理保健所別では、鹿児島市, 指宿, 徳之島(それぞれ1例)であった。

○ E型肝炎

県内における届出状況は、前年(2例)より1例多い3例(男性3例)で、月別では、1月, 3月, 4月(それぞれ1例)であった。年齢別では、60歳代(2例), 40歳代(1例)で、届出受理保健所別では、鹿児島市(2例), 徳之島(1例)であった。

(5) 五類感染症の発生状況

令和3年の県内における五類感染症の報告は149例で、梅毒(56例)、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症(21例)、急性脳炎(18例)、侵襲性肺炎球菌感染症(16例)、劇症型溶血性レンサ球菌感染症(9例)、後天性免疫不全症候群、クロイツフェルト・ヤコブ病(それぞれ6例)、百日咳、破傷風、侵襲性インフルエンザ菌感染症(それぞれ3例)、アメーバ赤痢、播種性クリプトコックス症、ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)、水痘(入院例に限る)(それぞれ2例)の届出があった。(表1-4)。

表1-4 五類感染症の発生状況 (報告数順)

疾患名	年	平成	24	25	26	27	28	29	30	令和	元	2	3
	梅毒		6	7	7	9	18	21	51	55	38	56	
カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症				1	13	15	10	25	27	24	21		
急性脳炎		8	0	7	11	17	21	26	29	14	18		
侵襲性肺炎球菌感染症			12	24	25	17	24	33	31	26	16		
劇症型溶血性レンサ球菌感染症		3	2	1	6	3	3	3	7	11	9		
後天性免疫不全症候群		8	12	12	9	11	18	8	13	12	6		
クロイツフェルト・ヤコブ病		3	4	4	10	4	6	3	3	4	6		
百日咳								153	728	83	3		
破傷風		4	4	6	5	4	5	8	5	4	3		
侵襲性インフルエンザ菌感染症				1	4	0	2	8	8	2	3		
アメーバ赤痢		7	5	6	7	7	7	7	6	5	2		
播種性クリプトコックス症			0	0	1	1	5	1	2	3	2		
ウイルス性肝炎(E型・A型を除く)		2	5	8	4	6	4	5	3	2	2		
水痘(入院例に限る)				4	4	3	5	3	5	3	2		
急性弛緩性麻痺								3	3	3	0		
風しん		4	386	0	0	1	0	3	2	1	0		
バンコマイシン耐性腸球菌感染症		1	0	0	1	1	0	0	1	0	0		
麻しん		1	0	5	0	0	0	0	1	0	0		
クリプトスポリジウム症		0	0	0	0	0	1	2	0	0	0		
侵襲性髄膜炎菌感染症			0	0	0	1	1	2	0	0	0		
薬剤耐性アシネトバクター感染症		0	0	0	0	0	1	1	0	0	0		
ジアルジア症		1	0	0	1	1	0	0	0	0	0		
合計		48	437	86	110	110	134	345	929	235	149		

○ 梅毒

県内における届出状況は、前年(38例)より18例多い56例(男性39例、女性17例)であり、月別では11月(10例)、10月(9例)、12月(8例)の順に多かった。

病型別では、早期顕症Ⅰ期(27例)、早期顕症Ⅱ期(22例)、無症状病原体保有者(7例)の順に、年齢別では20歳代(15例)、30歳代(14例)、40歳代(13例)の順に多く、届出受理保健所としては、鹿児島市(37例)、姶良(8例)、川薩(6例)の順であった。

○ カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

県内における届出状況は、前年(24例)より3例少ない21例(男性13例、女性8例)であり、月別では6月(4例)、4月、9月、10月(それぞれ3例)、2月、5月、12月(それぞれ2例)の順に多かった。年齢別では、70歳以上(15例)、60歳代(6例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(15例)、鹿屋(5例)、加世田(1例)であった。

○ 急性脳炎

県内における届出状況は、前年(14例)より4例多い18例(男性9例、女性9例)であり、月別では2月、8月(それぞれ3例)、1月、6月、10月、11月(それぞれ2例)、4月、5月、7月、12月(それぞれ1例)であった。年齢別では、10歳未満(14例)、10歳代(2例)、20歳代、70歳以上(それぞれ1例)の順に多く、届出受理保健所別では、鹿児島市(16例)、指宿、鹿屋(それぞれ1例)の順であった。

○ 侵襲性肺炎球菌感染症

県内における届出状況は、前年(26例)より10例少ない16例(男性14例, 女性2例)であり, 月別では2月, 7月, 11月(それぞれ3例), 5月, 6月(それぞれ2例), 3月, 8月, 10月(それぞれ1例)の順に多かった。年齢別では60歳代(6例), 70歳以上(5例), 10歳未満(4例), 50歳代(1例)の順に多く, 届出受理保健所としては鹿児島市(7例), 名瀬(5例), 鹿屋(3例), 徳之島(1例)の順であった。

○ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

県内における届出状況は、前年(10例)より2例少ない10例(男性2例, 女性7例)で, 月別では4月(3例), 5月, 6月, 7月, 8月, 9月, 12月(それぞれ1例)であった。年齢別では70歳以上(6例), 50歳代(3例)の順に多く, 届出受理保健所別では, 鹿児島市(7例), 西之表, 徳之島(それぞれ1例)であった。

○ 後天性免疫不全症候群

県内における届出状況は、前年(12例)より6例少ない6例(男性6例)であり, 月別では2月, 3月, 10月(それぞれ2例)であった。

病型別では患者2例, 無症状病原体保有者4例であった。年齢別では, 40歳代(3例), 30歳代, 50歳代, 60歳代(それぞれ1例)の順に多く, 届出受理保健所としては, 鹿児島市(4例), 加世田, 伊集院(それぞれ1例)の順であった。

○ クロイツフェルト・ヤコブ病

県内における届出状況は、前年(4例)より2例多い6例(男性1例, 女性5例)で, 月別では2月(2例), 1月, 3月, 8月, 12月(それぞれ1例)であった。年齢別では60歳(3例), 40歳代, 50歳代, 70歳以上(それぞれ1例)の順に多く, 届出受理保健所別では, 鹿児島市(3例), 川薩, 始良, 鹿屋(それぞれ1例)の順であった。

○ 百日咳

百日咳は、前年(83例)より80例少ない3例(男性1例, 女性2例)の報告があり, 月別では3月, 5月, 11月(それぞれ1例)の順に多かった。

年齢別では, 10歳未満(2例), 40歳代(それぞれ1例)の順に多く, 届出受理保健所別では, 鹿児島市(2例), 徳之島(1例)の順であった。

○ 破傷風

県内における届出状況は、前年(4例)より1例少ない3例(男性1例, 女性2例)で, 月別では8月(2例), 9月(1例)であった。年齢別では全てが70歳以上であった。届出受理保健所別では, 鹿児島市(3例)であった。

○ 侵襲性インフルエンザ感染症

県内における届出状況は、前年(2例)より1例多い3例(男性2例, 女性1例)で, 月別では2月(2例), 1月(1例)であった。年齢別では70歳以上(2例), 50歳代(1例)の順に多く, 届出受理保健所別では, 鹿屋(2例), 鹿児島市(1例)であった。

(6) 新型コロナウイルス等感染症の発生状況

○ 新型コロナウイルス感染症

令和3年の県内における新型コロナウイルス感染症の届出は、令和2年（1016例）より7090例多い8106例（男性4280例，女性3826例）であった。年齢別では、20歳代（1722例）が最も多く、次いで、30歳代（1260例），40歳代（1198例），10歳代（1102例），50歳代（949例）の順に多い届出数であった（図1-4-1）。月別では、8月（4136例），5月（1204例），9月（947例），1月（606例），6月（347例）の順に多い届出数であった（図1-4-2）。

なお、本届出数及び年齢別，月別の内訳等の数値は本県ホームページの集計値を参照している。

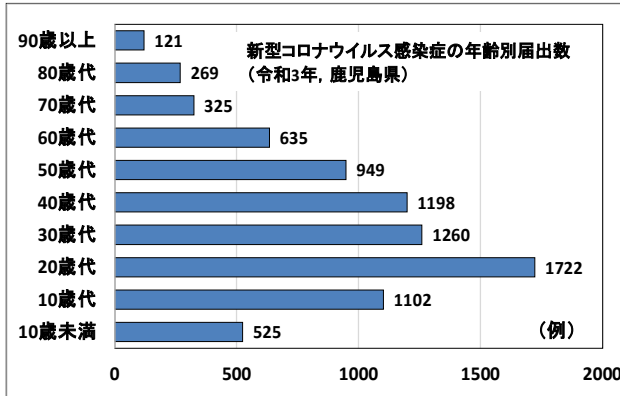


図1-4-1 新型コロナウイルス感染症の年齢別届出

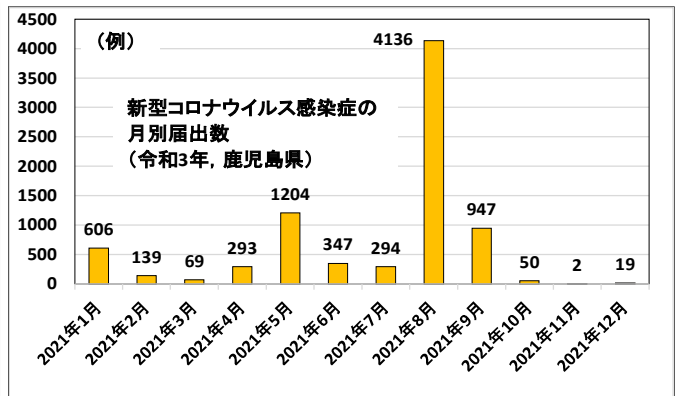


図1-4-2 新型コロナウイルス感染症の月別届出数

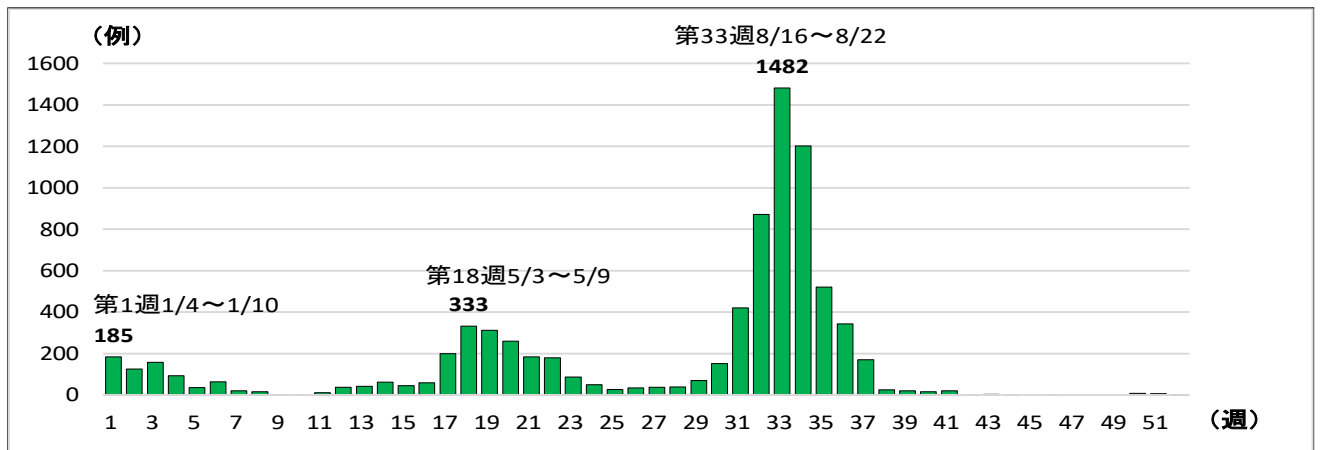


図1-4-3 新型コロナウイルス感染症の週別届出数

(7) 獣医師が届けを行う感染症の発生状況

県内において獣医師が届けを行う感染症として，鳥インフルエンザ（H5N1）の鳥類の届出が1例，川薩保健所管内からあった。11月10日，農場周辺の野生動物の可能性ある（出水市荒崎地区，ツル飛来地のねぐら水より同ウイルスが検出された）。

届出のあった事例は，死亡年月日は11月12日で，診断年月日は11月13日であった。このことを受け，11月13日～11月14日防疫措置により飼養約3800羽の殺処分が行われた。